

井筒雅風著

袈裟史

袈裟 *Kassara* とは、本来色の名である。

正色すなわち青黄赤白黒の五色およびその間色をのぞいた色で、銅のさびのよごれた色、錫のさびのよごれた色、鉄のさびのよごれた色の三色である。僧伽の成立とともに、俗人と区別してこのような色の被服（三衣）をまとったことから、袈裟は僧伽の総称となり、中国に伝わって、五条より二十五条にいたるデザインが完成する。わが国に仏教が伝来したとき、袈裟もまた伝来し、僧尼令には、木蘭色・青碧・卑色・黄・壞色などの色が規定され、余の色および綾羅綺錦の使用は禁止される。奈良時代に入って、仏教の国教化がすすむとともに、袈裟の色ではない緋や赤や紫の袈裟が天皇より勅許されるようになり、印度にあつて喜捨によるボロ布をよせ集めて作ったところから糞掃衣と呼ばれる袈裟も、各色を重

ねあわせ、縫い合せる袈裟製法の一つになる。平安中期、いわゆる国風文化の成立の時代、浅紫の綾・深緋の綾、裏は深滅紫帛といった高価な材料から作られ、紐の形式も変り、また神道思想による純白の平袈裟が生れるなど、袈裟の日本化が大いに進む。鎌倉時代、禅宗は、金襴を材料とし、唐平安朝の七条に代る九条から二十五条にいたる「大袈裟」を伝える。これに対して浄土宗・浄土真宗・日蓮宗は、天台系で平安朝の方式をうけついでいる。

たとえば、この複雑な紹介からでも推測願えるように、袈裟の変遷、歴史は、仏教思想のそれと、文字通り不即不離の関係を保っているが、さらに、各時代の織物の技術と、デザイン感覚、したがって各時代の一般俗人の衣裳とも密接に関連する。まことに袈裟の歴史は、文化史の流れの重要なポイントであるといわねばならない。その変遷と歴史を、僧伽の成立から説きおこし、現在の若干宗派の服装規定にいたるまで、

まことに要領よく概観しているのがすなわち本書なのである。筆者井筒雅風氏は、宝永二年の創業になる法衣の老舗井筒の社長。

傍ら宗教文化研究所理事長として、多年の蘊蓄を傾けられて本書はなっている。そして本書の今一つの特長は、インド・マトゥーラに建てられた菩薩像より、前進座演ずるところの天平の堯のステール写真にいたる、全二一〇葉の写真をもって解説されていることである。われわれが仏家の著作にむかってしばしば困惑する袈裟法衣の疑問は、本書によって解決する、実用の書でもある。

本書を僧服史の第一篇として、以後統篇を上梓の予定と聞くが、一・二望蜀の言を許していただくならば、法服の問題が文化史の重要なポイントであつてみれば、今少し間口をひろげて、服飾史にきりこんでいただいてもよいのではないか、また、豊富な写真の中に、せめて代表的な袈裟のカラー写真の教葉があれば、啓発されるどころ一層大であつたかと惜しまれる。統篇の一日も早く上梓されんことを期待して止まない。

(A5判 三三二頁 昭和四〇年二月 文化時報社刊 定価二、〇〇〇円)

(熱田 公)